

概要：防災・教育・医療・福祉・経済などの視点から、だれもが安心して毎日を送ることのできるまちづくりについて探究を進めた。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：人と動物が共存して暮らせるコミュニティ

取り組み：動物医療や補助犬についての探究を進め、多くの人に現状や課題を知ってもらう方法などについて考えた。

テーマ：学校教育

取り組み：現在の学校教育における現状や課題についての考えを深め、問題の改善や課題の解決に向けて探究を進めた。また、過疎地域の教育環境の改善について、世界の貧困地域との比較などを通して考えた。

テーマ：観光産業

取り組み：コロナ終息後の観光業回復や、観光を軸とする地域の活性化についての探究を進めた。

テーマ：児童福祉

取り組み：児童虐待やストリートチルドレンなど、さまざまな事情を抱えている子どもたちに目を向け、現状や課題について考えた。

テーマ：子育て支援

取り組み：子どもたちがのびのびと成長できる環境を作ることを目的とし、待機児童問題の現状や子育て支援サービスについて調査し、その探究を進めた。

テーマ：地域医療

取り組み：みんなが安心して治療・療養できる医療現場の実現を目的とし、コロナ禍の医療現場の実情や課題についての探究を進めた。また、在宅医療について、終末期の患者への対応に着目し、在宅でもできる治療法や、法律について調べ、在宅医療について倫理的側面と法的側面から考えた。

テーマ：地域のつながり

取り組み：生涯学習社会の実現について考えるとともに、幼老複合施設の必要性を追求し、人と人とのつながりについての考えを深めた。

テーマ：バリアフリー

取り組み：高齢者や身体障がい者の方にとって暮らしやすい社会の実現に向けて、バリアフリーの観点から探究を進めた。

テーマ：心のバリアフリー

取り組み：「ちがい」に理解があり、だれもが堂々と生きられる社会の実現に向けて何ができるかを考え、実際にインタビューを行うなどその探究を進めた。

テーマ：コロナ禍における日本の失業率

取り組み：新型コロナウイルスの影響による日本の失業率に着目し、影響を受けた人々の再就職のために何が求められているのかを考え活動した。

生徒・教員の変容

このゼミで目指す「笑顔のコミュニティ」とは何かということについて話し合い、医療、福祉、経済、教育などさまざまな分野からまちづくりについて考えた。コミュニティを形成するという点に関して、高校生である生徒たちにとっては実感を伴わないことも多く、探究テーマが絞り込めない生徒も見受けられた。2学期以降は、地域の活動に参加したり、地域の自治会の方とお話する機会をいただき、「高校生の自分たちもコミュニティの一員である」という意識が芽生え始め、コミュニティ形成に向かう姿勢が少しずつ前向きになっていった。その後、ゼミもコミュニティの一つであるという考えのもと、各自の探究テーマを持ち寄って自分たちが目指す「笑顔のコミュニティ」の実現に向けてさらに考えを深めた。「笑顔のコミュニティをつくる」という大きなテーマを目指すためには、身近にあるささいなことにも目を向ける必要があることに気付き、さまざまなことに対して「自分事」として捉えられるようになったことは、生徒たちの意識の持ち方や行動変容につながっていると考えられる。

(イ) 「いのちの輝きを未来に伝える」ゼミ

生徒： 26 名

概要：さまざまないのちがともに生きる世界、そのバランスが崩れ、今、共存することが難しくなっている。すべてのいのちが輝き、それぞれの力を発揮できる世界を実現するために、私たちはどう生きるべきなのか。私たちヒトを含む多くのいのちがバランスを保ち、共に暮らせる社会を作るためのヒントを探る。

ファミリー（チーム）での取り組み

テーマ：海のゴミを減らし、海の生き物を守ろう

取り組み：海洋生物のいのちを守りたい。海洋汚染が問題となっているが、その原因の一つは川から流れ込むゴミである。奈良県は海はないが川が海へと流れていることから、川のゴミを減らすことに着目した。

「秋篠川源流を愛し育てる会」の協力のもと、月に1度の川ゴミ清掃に参加しながら、川ゴミの調査を実施した。ただ、川のゴミ拾いをするだけでは、捨てる→拾う→捨てる→拾うのループは解決しない。捨てる人の気持ちを変えなければ問題は解決しない。そこで、どのようにすれば人の心を変えることにつながり、ゴミを捨てないようになるのか、を課題とし、川岸の草刈りをする、見られていることを示す「目」のポスターを掲示する、子どもの描いた「美しい海」の絵を掲示する、などを期限を決めて掲示しながら、変化が起こるかどうかの対照実験を行っている。



テーマ：野生動物との共存を目指して

取り組み：野生動物（シカやイノシシなど）との衝突が後をたたない今、全国的な問題となっている。「害獣」と呼ばれる野生動物は、人の生活圏に出てくると危険なため、駆除される。侵入を防ぐため、何十キロも続く防護柵を貼ったり、生きたかったいのちを駆除するだけで問題は解決したと言えるのか。自分たちにできる解決方法は何かを探る。奈良県農林水産課の担当者より現状を伺った。生駒市農林課、宇陀市農林課、地蔵可能な森づくりを目指す森庄銘木産業株式会社の協力のもと、駆除の現状やそのいのちのつなぎ方、また、野生動物との衝突を防ぐための方策など現状を学びつつ、何をすれば共存できるのか、を探る。



テーマ：ホッキョクグマと地球温暖化

取り組み：ホッキョクグマと地球温暖化の関係について考える。さまざまな文献を参考にし、ホッキョクグマの生態と彼らを絶滅の危機に迫りやる地球温暖化の現状について探る。また、天王寺動物園を訪問し、担当の方から動物園の役割や取り組みについてのお話

を伺う。Polar Bear Internationalの環境教育教材を参考に、地球温暖化が及ぼす影響について子どもたちに知ってもらうための日本語教材を作成。



テーマ：学びを活かし、森を生かせ！

取り組み：本校では1年時にボルネオ島の熱帯雨林と私たちの暮らしとの関係について学習する。その学びが実生活に活かされているのか。学習したことを忘れずに、環境保全のための取り組みができていくのか。自己反省からきた疑問を解決するため、また、ボルネオの環境保全への取り組みをする人を増やすため、社会心理学的アプローチを用いて、調査を実施した。日々使用するハンドソープ（認証なし）と、環境に配慮したRSPO認証ハンドソープを併設し、どちらの使用量が多いかを、全校生徒を対象に9カ所に設置、900回の測定でデータを出した。「学ぶ」という経験が行動に一定の効果を表すことがわかった。今後は「学び」や「経験」を呼び覚ます方法やその効果をさらに探っていく。



テーマ：犬・猫の殺処分ゼロを目指して

取り組み：全国の市町村における犬・猫の引き取り及び負傷動物等の収容並びに処分の状況（環境省）のデータから、殺処分率がゼロまたは低い市町村の取り組み等を導き出したり、譲渡率が高い市町村の取り組みについて、各行政へ問い合わせをしたりするなどしてデータを整理し、成功例を調べた。処分率が高い市町村へは成功例等を参考として提示するなど、現在の状況を改善するための方法を考えた。また、奈良県と協力し、犬猫の譲渡会等を実施している施設にボランティアに行き現状を学んだり、インタビューを実施して、今必要なことを調査するなどし、不足している物資への支援を呼びかけるなど。自分たちにできることを考えて活動している。



テーマ：睡眠の質と健康

取り組み：ヒトの健康、健やかな暮らしに関心があり、睡眠の質が人の健康につながるのかを調べた。先行事例を調べ、睡眠の質やその効果を調べる方法を探った。アンケート調査を実施しようと考えていたが、同志社女子大学真鍋えみ子教授にご指導いただき、実験を行うことに変更した。睡眠の前の行動が睡眠の質にどのように影響を及ぼし、起床後の活動に与える影響を調べるための実験の準備をしている。ある一定の条件のもと、睡眠状

態に入り、起床後、テストを実施する。解答できる数や正答率のデータを取り、比較することで、睡眠の質の影響を図る。



テーマ：外来生物から桜を守れ！

取り組み：特定外来生物「クビアカツヤカミキリ」が桜に害を及ぼすことを知り、奈良県におけるクビアカツヤカミキリの被害を調べた。また、奈良県水循環・森林・景観・自然環境部より、秋篠川沿いの桜並木を重要監視地点とし、その定期的な見回りを依頼され、調査をすることになった。樹木医の指導のもと、157本の桜に対し、ラベリングをしたのち、2度の調査を実施した。クビアカツヤカミキリに関しては現在は駆除の方法をとっているが、さまざまな外来生物に対し、侵入の経緯など、外来生物となる原因を探り、解決の糸口を見つきたい。



テーマ：畜産動物のいのちの重み

取り組み：牛乳の廃棄などが取り沙汰される中、畜産動物のいのちの重みを伝える方法を考えた。奈良市にある植村牧場を訪問し、畜産動物の現状についてお話を伺った。その際、牛に与える配合飼料を分けただき、内容を調べ、牛一頭が育つのにどれだけの餌が必要か、から、植物のいのちの数に置き換えて表現することを考えた。配合飼料に含まれるトウモロコシなどを乾燥させ、計算し、データを出した。



生徒・教員の変容

「いのち」と向き合うゼミであるが、テーマの大きさに関わらず、自分たちがどんな行動を起こすことで、現状が変わるのか、問題が解決できるのか、まずは動いてみることを働きかけた。失敗を恐れ、なかなか動き出せなかったり、少しの活動で満足してしまったりしていた生徒たちであるが、少しずつ自走し始めている。机上で片づく問題はなく、自分たちがどう生きるか、何が正しいと思ひ、行動するか、卒業後の人生にもつながる価値観を常に問いかけるように心がけた。

「なんとなくこれが問題だと思ひ」「こうすれば解決できると思ひ」ではなく、エビデンスを取ることを、実際に活動してみることを、タイミングを見ながら背中を押すよう心が

けた。夏休み、冬休み等にもミーティングを重ね、時にはアドバイスを、時には「待つ」など、担当者も授業やミーティングの前には議論を重ね、そのバランスを試行錯誤した。地域や行政の方、スタディツアーでは最前線でいのちと向き合う人に出会う機会を与えられるよう、働きかけや準備には時間をかけた。

生徒・教員どちらにとっても挑戦であり、探究の時間である。私たちも生徒とともにさまざまな問題に意識を持ち、どうすれば問題解決につながるのか、持続可能な未来につながるのか、彼らの未来を生きる姿を想像しながら活動を続けている。

